

教育研究業績書		
令和 3 年 3 月 31 日		
氏名 八木 典子		
研究分野	研究内容のキーワード	
社会学、健康科学、スポーツ科学	食生活、生活科学、栄養生化学、栄養教育、生活習慣病	
教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1. 教育方法の実践例 1) 双方向授業の実践	平成 9 年 4 月 ～ 令和 3 年 1 月	公衆栄養学実習は、地域公衆栄養活動計画を PDCA サイクルに基づき作成し、計画、実践、評価の基礎練習を行う。各班は、班内で相互に意見交換を行い、課題をまとめていくが、行った内容について、各班の実習課題の目的、分析、計画、評価、考察をまとめて、中間および最終報告会を行い、班を単位とした相互討論を行う。このことにより、毎回の実習目的と実習に対する評価を学生自ら行なうことができる。また、プレゼンを行い相互に評価をすることで、回を追うごとにプレゼンテーション能力の向上と実習目的の把握、考察力の向上が認められる。
2) 小テストの活用	平成 24 年 ～ 令和 3 年	基礎栄養学 (平成 24 年) 基礎栄養学は、学生の苦手とする科目であるが、基礎知識をしっかりと身につける必要があるため、毎回の講義で、この講義のテーマと講義内容の重要点を十分説明し、次回の講義の初めに前回の重要点を文章化した小テストを行なった。小テストは評価点に反映されることを明示し、十分に復習することを促した。小テストの後、解答を示し、各自誤った部分の訂正を行なわせた。小テストは 14 回にわたって行ない、全ての小テストを学習すれば、最低の基礎栄養学の知識は身につくようにした。この方法は、学習ポイントのつかめない学生にとって、学習効率をよくなり、知識の修得率は非常に良くなったと評価できる。
		公衆栄養学 (～令和 3 年)

		覚えることの多い科目のため、前回の講義内容の重要点について、毎回講義の初めに小テストを行った。小テストの解答は、学生に発表させ、その後正解の考え方について解説を行った。このことで、各講義の重要点を確認することができるとともに、前回の講義の復習をすることで、重要点を覚えやすくする効果があった。
<p>2. 作成した教科書、教材</p> <p>1) Nブックス 公衆衛生学 (初版)</p> <p>～</p> <p>社会・環境と健康 公衆衛生学 (改訂版初版、2版、3版、4版、5版)</p>	<p>平成 14 年 4 月 ～現在</p>	<p>建帛社 管理栄養士に必要な公衆衛生学の知識を分かりやすくまとめた教科書である。できるだけ図・表を入れて、要点を分かりやすく示してある。公衆栄養学の基礎となるような知識を基本に構成している。(180 頁) 公衆衛生学講義に使用</p> <p>建帛社 N ブックス 公衆衛生学を新カリキュラム対応に全面書き換え (225 頁) (苫米地孝之助編著、著者、稲益健夫、大江武、後藤政幸、堂前嘉代子、中村信也、八木典子) 執筆者会議において、以前執筆した「公衆衛生学概論」(三共出版)の執筆経験から、本の構成や編集に対する希望を提案し、ほぼその提案が採用されたので、教育効果が上がる教科書ができた。 担当部分：8 章 社会保障制度 社会保障制度の考え方、わが国の健康現状と社会保障制度、医療制度と医療費、高齢者医療費負担、医療計画、福祉・介護制度の概要、社会福祉、介護保険制度、介護保険の実施、介護給付、予防給付、地域支援事業等について記述。(pp.138～154 単著) 9 章 4 学校保健 学校保健の概説、学校保健行政の仕組み、学校保健に関する法規と保健教育・保健管理・学校安全・学校給食等の関連、学童期の健康状態と学校保健の関連等について記述。 (pp.180～188 単著)</p>
<p>2) 公衆栄養学 (初版～改訂第 5 版)</p>	<p>平成 14 年～ 平成 29 年</p>	<p>南江堂 国立健康・栄養研究所監修シリーズの管理栄養士教育のための公衆栄養学の教科書である。初版の教科書を平成 25 年に管理栄養士国家試験ガイドラインの改訂に伴い改訂し</p>

<p>3) 公衆栄養学ワークブック</p>	<p>平成 21 年～ 平成 28 年</p>	<p>た。管理栄養士国家試験ガイドラインに準拠し、管理栄養士が公衆栄養学の知識として理解すべき内容を記述している。内容的には一定の高度な内容量を含んでいるので、教育担当者が参考にして教育するような使用も可能である。(342 頁)</p> <p>(田中平三、徳留信寛、伊達ちぐさ編著、著者、吉川賢太郎、早淵仁美、武見ゆかり、八木典子、他多数)</p> <p>担当部分：第 2 章 A 社会環境と健康・栄養問題</p> <p>わが国の人口問題、人口構成の変化と少子高齢化の問題、少子化の問題、長寿社会のありかた、長寿社会と健康問題、食糧問題等について記述。(pp.19～25 単著)</p> <p>みらい</p> <p>公衆栄養学の実習書で、第一部 (UNIT 1) の食事調査の実際と第二部 (UNIT 2) の公衆栄養活動計画策定の実際からなる。各 UNIT は、実習内容順にさらに細かくグループ化され、各グループでの実習目的を明示しており、ワークシートを元に具体的な実習を組むことができる。課題ごとのデータや解析方法、レポートフォーム等は電子媒体で行なうようにしてあり、自分で実習を行うことができるように工夫されている。(211 頁)</p> <p>(徳留裕子、北川郁美、八木典子編著 著者今枝奈保美、後藤千穂 他 6 名)</p> <p>担当部分：UNIT2-2 地域アセスメント</p> <p>プリシード・プロシードモデルを使って、プリシード部分に当たるアセスメントの方法を実習により学ぶことを目的としている。プリシードは 4 段階に分かれているため、第 1 段階から第 4 段階におけるアセスメント方法についてワークが行なえるようにしている。(pp.94～102 単著)</p> <p>2-3 優先課題の選定と重点目標の設定</p> <p>有効な公衆栄養活動を実施するために優先すべき課題を選択し、課題を達成するための具体的な目標を設定する手法を身につけるためのワークが行なえるようにしている。(pp.103～111 単著)</p> <p>2-5 計画の立案</p> <p>短期、中期、長期目標を達成するための計画の立案方法についてワークが行なえるようにしている。(pp.119～125 単著)</p> <p>2-7 公衆栄養活動における説明・報告</p>
-----------------------	-----------------------------	--

		公衆栄養活動の様々な場面におけるプレゼンテーション、報告書、説明方法等のあり方についてワークが行なえるようにしている。 (pp.140～148 単著)
3. 教育上の能力に関する大学等の評価 (評価者：広島国際大学 学長)	平成 25 年	当該教員は、甲子園大学において 35 年間勤務し、長期にわたり管理栄養士の養成に携わってきた。公衆衛生学 30 年、公衆栄養学 27 年の教育経験を持ち、現在までの教育の経験を評価されて、管理栄養士教育に関連する学会における管理栄養士教育のコアカリキュラム作成委員や国家試験ガイドラインの作成委員、国家試験問題作成委員としても活動している。現場経験は無いが、行政機関の地域計画委員や神戸市医療審議会委員等での活動、公的機関における食事調査、食生活調査、県民の健康意識調査等の検討委員を兼任しており、行政機関での公衆衛生、公衆栄養の地域計画、改善の方向性を理解し、教育に反映できていると考える。以上のことから、本学において予定している授業科目を担当するに十分な教育上の能力を有していると考ええる。
4. 実務の経験を有する者についての特記事項		なし
5. その他 1) 表彰 2) 委員等	平成 13 年 11 月 平成 21 年 6 月 平成 26 年 5 月 令和 2 年 8 月 平成 15 年 8 月 平成 21 年 8 月 平成 22 年 3 月 平成 23 年 8 月	全国栄養士養成施設協会 会長 表彰 日本栄養士会 会長 表彰 兵庫県知事 表彰 (栄養士養成成功労者) 厚生労働大臣 表彰 (栄養士養成成功労者) 日本栄養改善学会 管理栄養士養成コアカリキュラム委員 (1 期、2 期) (平成 20 年 5 月まで) 管理栄養士国家試験出題 委員 (平成 23 年 4 月まで) 管理栄養士国家試験出題基準改定検討会 委員 (平成 22 年 12 月まで) 管理栄養士国家試験出題 委員 (平成 25 年 4 月まで)
職務上の実績に関する事項		
事 項	年 月 日	概 要
1. 資格、免許 (1) 中学 1 級、高校 1 級普通免許 (2) 栄養士免許取得 (3) 管理栄養士免許取得	昭和 48 年 4 月 昭和 47 年 5 月 昭和 60 年 11 月	中学 1 級、高校 1 級普通免許 (家庭科) 登録番号 奈良県 第 1626 号 登録番号 第 27745 号

2. 特許等			なし	
3. 実務の経験を有する者についての特記事項				
4. その他				
研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(著書) 1 若者の生活、食・栄養と健康	共著	平成 16 年 4 月	日本学会事務センター	日本衛生学会学術総会でのワークショップを基にして出版された。健康上問題の多い若者に視点をあてて、多面的に若者の健康状態と置かれている環境について分析を加えている。(205 頁) 日本衛生学会監修 (木村美恵子、新保慎一郎編、著者池田正之、木村美恵子、 <u>八木典子</u> 、他多数) 担当部分：若年期の食生活習慣からみた生活習慣予防
2 The SAM Model of Senescence	共著	平成 6 年 3 月	Excerpta Medica	食生活調査を通して、若年期における親からの食生活教育と食生活習慣が、肥満を含めて生活習慣病の発症にどのように関わっているかを検討し報告した。(pp. 73 ~ 86 単著) 老化促進モデルマウスの国際学会の発表の中から、発表内容をまとめて本に示し、老化促進モデルマウスを用いた老化研究の最先端の紹介をおこなったもの。(458 頁) (T. Takeda、 <u>N. Yagi</u> 、他多数) 担当部分；Effect of gender and exercise on aging in the senescence accelerated mouse (SAMP8//Ya) 雌雄の老化促進モデルマウスに対し強制的な運動負荷を行った場合、雌に比べ雄は運動の持続性に乏しく、老化状態も雌に比べて著しく進行することを報告した。担当部分；主研究 (<u>Yagi N.</u> , Yagi H.) (pp. 401~404)
(学術論文) 1 Influence of diet on the induction of hepatic ceroid pigment in rats by	共著	昭和 51 年 4 月	Toxicol. Appl. Pharmacol. Vol.36 pp131-141	PCB を投与すると、飼料中の脂肪酸組成の異なりにより脂肪肝を生ずる場合と黒色肝を生ずる場合があることを報告した。さらに、黒色肝を組織

<p>polychlorinated biphenyls. 《査読付き》</p> <p>2 Sodium potassium magnesium and calcium levels in polychlorinated biphenyl(PCB) poisoned rats. 《査読付き》</p>	<p>共著</p>	<p>昭和 51 年 11 月</p>	<p>Bull. Environ. Contam. Toxicol. Vol.16 pp516-519</p>	<p>的に検討すると、過酸化脂質とたんぱく質の結合したセロイド色素が沈着していることが判明した。この研究により、PCB 投与が生体内の過酸化脂質を急速に促進することが明らかになり、PCB 投与と生体内過酸化のメカニズムを検討する元になった論文である。博士学位論文の一部 (11 頁) (Itokawa Y., <u>Yagi N.</u>, Kaito H., Kamohara K. and Fujiwara K.) 担当部分：主で研究全般を担当 (担当頁特定不可能)</p> <p>実験動物 (ラット) に PCB を投与した時の生体中ミネラルの変動について検討を加えた結果を報告した。(4 頁) 博士学位論文の一部 (<u>Yagi N.</u>, Kimura M., Itokawa Y.) 担当部分：主で研究全般を担当 (担当頁特定不可能)</p>
<p>3 The isolation and characterization of a lethal protein from Kintoki beans. 《査読付き》</p>	<p>共著</p>	<p>昭和 52 年 12 月</p>	<p>J. Nutr. Sci.Vitaminol. Vol.23 pp525-534</p>	<p>金時豆を生で実験動物に与えると死に至る植物毒が存在することが判明した。そこで、この植物毒を精製して毒物の性状を検討し、報告した。つまり、単一になった毒物は、糖と結合したたんぱく質であり、ヘムのアグルチニン作用をもつものであった。本論文の主体は修士論文 (10 頁) (Hamaguti Y., <u>Yagi N.</u>, Nishino A., Mochizuki T., Mizukami T., Miyoshi M.) 担当部分：主で研究全般を担当 (担当頁特定不可能)</p>
<p>4 PCB 及び DDT 投与ラット肝臓の組織化学的検索 《査読付き》</p>	<p>単著</p>	<p>昭和 55 年 6 月</p>	<p>日本衛生学雑誌 Vol.35 p p.524-532</p>	<p>PCB 投与ラットに関する肝臓の組織学的検索をおこない、セロイド色素の沈着が生ずることを報告した。本研究は、この研究をさらに発展させ、PCB と同様の有機塩素系薬剤である DDT 投与ラットにおいても肝臓にセロイド色素の沈着が生ずるかどうかが検討した。結果は、DDT 投与ラットにおいては著しいセロイド色素の沈着は認められず、有機塩素系薬剤でも薬物代謝酵素活性や排泄経路の異な</p>

<p>5 PCB 投与ラットの肝臓脂質代謝について 《査読付き》</p>	<p>単著</p>	<p>昭和 55 年 8 月</p>	<p>日本衛生学雑誌 Vol.35 p p.659—664</p>	<p>りによって生体に対する影響が異なることを報告した。博士学位論文の一部 (9 頁) PCB を投与したラットの肝臓は、異常に肥大し、脂肪肝を生ずるが、本報告はその機構について脂質の合成系を主体に解明した。つまり、PCB 投与により総脂質・リン脂質・トリグリセライド・コレステロールの著しい増加が生じ、特に肝臓へのコレステロール蓄積が著しい結果を得た。博士学位論文の一部 (6 頁)</p>
<p>6 Lipid metabolism in polychlorinated biphenyl(PCB) poisoned rats. 《査読付き》</p>	<p>共著</p>	<p>昭和 55 年 12 月</p>	<p>Environ. Research Vol.22 pp.139—144</p>	<p>PCB を投与したラットで脂肪肝を生ずる機構について、生体内脂質の動向を総合的に捉えることにより検討を加えて報告した。つまり、生体内脂質の合成・移動速度を測定すると、コレステロールの合成および他の組織から肝臓への移入が著しく、肝臓から他の組織への流出が間に合わない状態で脂肪肝が生じていることが判明した。このコレステロール合成の増加は、PCB の排泄機構と深く関係していることも判明した。博士学位論文の一部 (6 頁) (Yagi N., Itokawa Y.) 担当部分：主で研究全般を担当 (担当頁特定不可能)</p>
<p>7 Mechanism of lipid peroxide formation in polychlorinated biphenyls(PCB) poisoned rats. 《査読付き》</p>	<p>共著</p>	<p>昭和 59 年 6 月</p>	<p>Environ. Research Vol.34 pp18-23</p>	<p>PCB 投与ラット生体内での過酸化脂質生成機構および PCB 排泄機構を解明した報告。(6 頁) (Yagi N., Kamohara K., Itokawa Y.) 博士学位論文の一部 担当部分：主で研究を担当。共同研究者と、本人担当部分抽出不可能。 (担当頁特定不可能)</p>
<p>8 Effect of differences in diet composition on polychlorinated Biphenyls poisoning. 《査読付き》</p>	<p>共著</p>	<p>昭和 60 年 6 月</p>	<p>Bull. Environ. Contam. Toxicol. Vol.34 pp709-714</p>	<p>PCB の毒性は飼料中の脂肪酸組成の違いで異なることを報告したが、この毒性は PCB 投与後ただちに出現するのではなく、一定期間後に出現する。このことから、PCB そのものの毒性よりも PCB の分解で生ずる物質による毒性の影響が強く現れることが判明し、飼料中の脂肪酸組成は PCB 分解に対して影響を与えることを報告した。(6 頁) (Yagi N., Kamohara K., Itokawa Y.)</p>

<p>9 Spontaneous and artificial lesions of magnocellular reticular formation of brainstem deteriorate avoidance learning in senescence-accelerated mouse SAM 《査読付き》</p>	<p>共著</p>	<p>平成 10 年 9 月</p>	<p>Brain Research Vol.791 pp.90-98</p>	<p>博士学位論文の一部 担当部分：主で研究全般を担当 (担当頁特定不可能) 老化促進モデルマウス (SAMP8) は、生後まもなくの時点から脳幹部に海綿状変性を生じ、週齢を重ねるにつれて変性が拡大する。それとともに、学習・記憶状態の悪化を生じることが判っているが、海綿状変性と学習・記憶との関連は証明されていなかった。本論文は、この関連を証明し、脳幹部が学習・記憶障害に関与している可能性を論じたものである。(9 頁) (Yagi H. Akiguchi I. OhtaA. <u>Yagi N.</u> Hosokawa M. and Takeda T.) 担当部分：脳の内線状変性状態と学習記憶の関連があることを証明する研究を、特に抗酸化物質を用いて行った。(担当頁特定不可能)</p>
<p>10 Long-Term Ingestion of Dietary Diacyl- glycerol Lowers Serum Triacyl glycerol in Type II Diabetic Patients with Hypertriglyceridemia</p>	<p>共著</p>	<p>平成 13 年 8 月</p>	<p>J. Nutr. Vol.131 pp.3204 - 3207</p>	<p>臨床試験において、血糖値のコントロールはできても、血清トリグリセライドが高値を示す患者に対し、ジアシルグリセロールを食事脂肪として与えると、血清トリグリセライドの減少が認められた。このことは、従来の厳しい脂肪制限が緩和されるとともに、患者の QOL の維持にも有効であることを報告した。(4 頁) (K. Yamamoto, H. Asakawa, K. Tokunaga H. Watanabe, N. Matsuo, I. Tokimitsu And <u>N. Yagi</u>) 担当部分：主著者の博士論文のため、研究の方向付けと研究全般の指導 (担当頁特定不可能)</p>
<p>11 Effects of diacylglycerol administration on serum triacylglycerol in patient homozygous for complete lipoprotein lipase deletion. 《査読付き》</p>	<p>共著</p>	<p>平成 17 年</p>	<p>Metabolism 54, pp.67-71</p>	<p>LPL 欠損症で長期にわたり脂肪摂取制限を強いられる患者に対し、ジアシルグリセロールを食事脂肪として与えると、血清トリグリセライドの減少が認められ、ジアシルグリセロールを指示どおりに摂取しておれば、血中のトリグリセロールのコントロールが可能であることを報告した。(5 頁) (K. Yamamoto, K. Tokunaga, H. Asaka, S. Meguro, H. Watanabe and <u>N. Yagi</u>)</p>

<p>12 Diacylglycerol oil ingestion in type-2 diabetic patients with hypertriglyceridemia 《査読付き》</p>	<p>共著</p>	<p>平成 18 年</p>	<p>NUTRITION Vol.22(1), pp.23-29</p>	<p>担当部分：研究全般の指導 (担当頁特定不可能) 糖尿病性心疾患の発症に HDL-C と LDL の particle size が影響しているとされている。そこで、高トリグリセライド血漿を伴う 2 型糖尿病患者にジアシルグリセロール (DAG) またはトリアシルグリセロール (TAG) を含む脂肪を摂取させ、HDL-C と LDL の particle size の変動を検討した。結果、(DAG) 群の方で HDL-C および apolipoprotein-AI が著しく高く、PPAI-1 濃度は有意に低くなっていた。また、particle size の LDL 粒子サイズが大きくなっていた。このことから、DAG は糖尿病患者の脂質代謝改善に有効である可能性を報告した。(7 頁) (Yamamoto K., Takeshita M, Tokimitsu I., Watanabe H., Mizuno T., Asakawa H., Tokunaga K., Tatsumi T., Okazaki M. and <u>Yagi N.</u>) 担当部分：主著者の博士論文のため、研究全般の指導 (担当頁特定不可能)</p>
<p>13 Beneficial effects of diacylglycerol oil in a diet therapy for patients with type2 diabetic nephropathy 《査読付き》</p>	<p>共著</p>	<p>平成 18 年</p>	<p>Diabetes Care 29(2), pp.417-419</p>	<p>腎炎を伴う糖尿病患者にジアシルグリセロール (DAG) をトリアシルグリセロール (TAG) に代えて与えることにより腎障害の進行が延期されることを報告した。(3 頁) (Yamamoto K., Tomonobu K., Asakawa H., Tokunaga K., Hasse T., Tokimitsu I. and <u>Yagi N.</u>) 担当部分：研究全般の指導 (担当頁特定不可能)</p>
<p>14 高校 1 年生野球部員の身体組成に及ぼす栄養指導の効果 《査読付き》</p>	<p>共著</p>	<p>平成 18 年</p>	<p>栄養学雑誌 64(1), pp.13-20</p>	<p>高校 1 年生に入学した野球部の生徒に対し、栄養教育・食事指導をおこなった結果、指導介入群は体脂肪率の有意な低値と除脂肪量の有意な高値を示した。また、指導群において食事内容の変化および意識の変化を認めたことから、指導内容が理解された結果行動が変化し、体格の向上につながったことを認め報告した。 (8 頁) (海老久美子、中尾英美子、上村香久子、<u>八木典子</u>)</p>

<p>15 大学生アスリートの食生活の実態について一居住環境の違いによる比較— 《査読付き》</p>	<p>共著</p>	<p>平成 21 年 8 月</p>	<p>日本健康体力栄養学会誌 Vol.14(1) pp.11-19</p>	<p>担当部分：主著者博士論文のため、研究全般の指導 (担当頁特定不可能) 高校生までは食生活を管理されていた大学生アスリートが不規則な食生活になっていく要因について検討を加え、大学生アスリートに対する有効な栄養教育、食事指導について考察した。(9 頁) (福田典子、海老久美子、上村香久子、岡村浩嗣、八木典子) 担当部分：研究全般の指導 (担当頁特定不可能)</p>
<p>16 全国大会出場高校生公式野球部員の体格、身体組成に対する栄養指導の影響について 《査読付き》</p>	<p>共著</p>	<p>平成 21 年 8 月</p>	<p>日本健康体力栄養学会誌 Vol.14(1) pp.20-25</p>	<p>全国大会出場の高校公式野球部員の体格、食事調査を行い、栄養指導の有無と食意識、食事の摂取状況、体格について検討を加えた。この調査により、高校野球連盟に属している全国の高校野球児に対して食に関する意識の向上と栄養教育の効果をあげることが目的としたものである。 (6 頁) (海老久美子、上村香久子、福田典子、八木典子) 担当部分：研究指導と調査、分析の分担 (担当頁特定不可能)</p>
<p>17 大学生の硬式野球選手と陸上中長距離選手の食生活状況の比較 《査読付き》</p>	<p>共著</p>	<p>平成 22 年 4 月</p>	<p>日本健康体力栄養学会誌 Vol.14(2) pp.56-61</p>	<p>競技種目の違いが食事に対する意識、知識、行動にどのように影響を及ぼすかについて検討を加えることにより、競技種目による食事指導の方法を検討した。(6 頁) (福田典子、海老久美子、上村香久子、岡村浩嗣、八木典子) 担当部分：研究全般の指導と調査協力 (担当頁特定不可能)</p>
<p>18 一人暮らしの学生の食行動についての検討</p>	<p>共著</p>	<p>平成 28 年 9 月</p>	<p>広島国際大学総合教育センター紀要 創刊号</p>	<p>大学入学後の一人暮らしの学生の実態調査を行い、学部別、学年別の朝食欠食状況を分析した。その後、朝食の摂取を促す介入指導を行った結果について分析し、報告した。 (澤村恭子、木村留美、木村要子、高尾文子、宮脇美幸、塚本幾代、八木典子)</p>
<p>(その他)</p>				